綾守竜樹
表紙／B-RIVER
ソー
淫風譚
『淫闘帖』薊外伝
試し読み版
二次元ぷち文庫
2D PETIT POCKET NOVELS

当ファイルは、モバイル二次元ドリームにて配信された
『くノ一淫風譚　『淫闘帖』薊外伝』
に基づいて作成しております。

※本作は二次元ドリームノベルズ『くノ一淫闘帖　上巻　天正秘録編』『くノ一淫闘帖　下巻　天正秘録編』（キルタイムコミュニケーション・刊）とともにお読みいただきますと、よりお楽しみいただけます。

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

くノ一
淫風譚
『淫闘帖』薊外伝
綾守竜樹
表紙／B-RIVER
二次元ぷち文庫

登場人物紹介

Characters

麻（あざみ）

百花忍軍に属する淫術に秀でた若きくノ一。現在は遊女に扮し、『氷雨（ひさめ）』と名乗る。

飛鳥井 正徹（あすかい しょうてつ）

藩主の隣に座し、藩主の言葉を書きとめる身分の武士。書の世界に異常なまでに耽溺する男。

くノ一淫風譚『淫闘帖』薊外伝

※

久ノ一の術と云は、三字を一字としたる者を忍に入るを云也。たぢからは入難く思ふ時、此術を可用也。

［現代語訳］

「くノ一の術」というものがある。これは相手先に、女性を忍びこませる術である。命名の由来は、「女」という3画の漢字を1画ごとに分解してみればわかるはずだ。読者が、もし男性では入りこみにくい場所で情報を得ようとしているなら、この術を使ったほうがよい。

『萬川集海』巻第八（延宝4年）

※

『肉を覆すは操りの極み、主従を躾る始めなり』

よいですか、蕾たち。

あなた方は伊賀の懐刀、百花忍軍のくノ一です。それもこの私、百花の頭たる薊が育てた花（オンナ）なのです。

蜜蜂（オトコ）を引きよせたら、逃がしてなりません。色迷いした男たちに、決して後れてはなりませぬ。

われらくノ一にとっては、月夜の下、寝床の上こそ真の戦場。男を誑かし、蕩かせ、傀儡に堕とせる千載一遇の機会なのです。

今宵学んだ淫術の理（コトワリ）、其（ソ）を努々（ユメユメ）、忘れないように。

この世に男と女がいるかぎり、淫術は私たちにとって最強の武器であり……最凶の鬼門です。

『淫は陰陽、相反の顕現なり』

「淫」は、諸刃の剣なのです。われら女の躰が、どれだけ悦びたがっているものなのか……われらの心が、どれだけ服したがっているものなのか……見誤ってはなりません。

よいですか。

犯されたい、陰茎に征服されたい、男に服従したい……女の本能に秘められた隷属欲の強さを、決して侮ってはなりません。

いかに超人的な修行を積み、三字を一字に解(ホグ)しても、われらの下腹部に巣くう牝が死ぬわけではないのです。

……そうですね、これから他山の石となるよう、昔話を始めましょう。

この私、百花忍軍の頭花(カシラ)である薊が、自らの「内なる牝」と対面させられた一件……そ

れを語りきかせましょう。

そんなに驚いた顔をせぬように……私も始めは、あなた方と同じ未熟なくノ一だったのです。

さて、話を始めるまえに……うしろの掛け軸をごらんなさい。

妖しい書でしょう？

見ていると、なんとなく落ちつかない気持ちに……はっきり言います、いやらしい気持ちになるでしょう？　口のなかが干上がり、乳芽が硬くなり、腰の裏が重くなり……股座が疼くでしょう。あれは、

「歓喜字（カンキジ）」

と言います。筆を走らせた者の呪いが……怨めしさが籠められた文字なのです。

ええ、怨めしさです。

あまりにも……すぎるので、我が身を呪ってしまうのです。女に生まれたことを、後悔させられてしまうのです。

そう。

あれは、この薊が書いた……いえ、書かされた文字なのです。

※

私が、まだ中忍だったときの任務です。

一、御下し元（メイレイシャ）
伊賀三上忍ガ一人
百地丹波（モモチタンバ）
一、御下し

艶仕掛(イロタラシ)け
一、仕掛け先
飛鳥井正徹(アスカイショウテツ)

飛鳥井は、さる藩の御算用(オサンヨウ)で、御次執筆(オツギシッピツ)に任じられていた武士です。

ああ、あの藩は変わった家制を敷いていましたから、あなた方には初耳かもしれませんね……御算用は、要するに会計を司っている部署です。御次執筆は藩主の隣に座し、藩主の言葉を書きとめる身分。

つまり、飛鳥井は藩政における第一人者だったのです。

この任務を命じられたとき、私は一八歳。くノ一としてそれなりに実戦を重ね、実績を積み、武術にせよ淫術にせよ、そこそこ自負できるようになっていました。

正直に言えば……天狗になっていました。特に艶仕掛け、淫術を使う任務に関しては、いっぱしの上忍気取りでいました。

なにしろ連戦連勝、向かうところ敵なしだったのです。どんな男であっても、色香と肉技で骨抜きにしていました。相手と一度でも目を交わしたら、もう務めを終えた気分になっていたのです。

ええ、救いがたい慢心ですね……それが私に、内なる牝を覚醒めさせてしまったのです。

私は三字(クノイチ)どころか、一字(オンナ)でさえいられなくなって……あの歓喜字を書かされたのです。

※

飛鳥井に近づき、馴染みの遊女となるまで一五日ほどかかりました。

飛鳥井はその時、齢四十。中年太りで、孕んでいる女のごとき体躯をしていました。丸々とした顔貌に、刻みを入れたような目。申し訳ていどの髷に、薄い眉。

武張ったところが欠片(カケラ)もなく、商人のようでした。手指の胼胝(タコ)と爪の墨染まりも、その

印象を強めていたと思います。

計算に強く、会話の駆けひきには冴えを見せましたが……立ち居振るまいから愛撫の仕方まで、まるで駄目でした。

飛鳥井曰(イワ)く：

おお、おおお……な、なんという気持ちよさか……氷雨(ヒサメ)どの……そなたは、儂の弁天様じゃ……お、おおっ！

「氷雨」は、当時の私が使っていた源氏名です。

氷雨、つまり薊曰く：

ああ、飛鳥井さま……氷雨もたいへん気持ちようございます……。

飛：そっ、そなたの股道具はむろん……こ、このムッチリとした尻が……いや、腰のくびれも……まてまて、掌(タナゴコロ)から少しあふれるくらいの乳房も……。

薊：……過分にお褒めいただかれては……ああ、氷雨は恥ずかしゅうございます。

飛：なぜ顔を隠すのじゃ、さあ、儂に見せてくれ……その黒髪を掻きあげて、喘ぎを愛でさせてくれ……。

　そのころの私は、いまより髪を伸ばしていました。貝殻骨にかかるくらいだったと思います。

飛：……おお、美しい……そなたは、ほんに類い希なる瓜実じゃ……広めの額が、頭の良さを……細めの眼が、気品を感じさせる……。

薊：もうおっしゃらないでくださいまし……恥ずかしさと嬉しさとで、氷雨は溶けてしまいます……。

飛：溶けるか……溶ける……そうじゃ、そなたの風情は「雪女」じゃ！

薊：……ゆき……おんな？

飛：そなたの艶やかさは、まさに冬の氷柱じゃ……其を溶かせるとは何たる甘美……わ、儂は！　儂は、おぬしを……おおっ、何度でも溶かしたいぞ……。

……そこのあなた。

蕾の巴（トモエ）、あなたのことです……この程度の睦言を聞かされたぐらいで、頬を染めたりせぬように。淫術において、言の葉は体技に負けずともおとらぬ武器。われらくノ一は、虚を実に見せかけて語らねばなりません。

どのような思いを抱いても、あからさまに表してはなりませんよ。

……では続けます。

薊：まあ、嬉しゅうございます……そして、ひどうございますわ……。

飛：ひどい、じゃと？

薊：ええ、そうです……つまり、殿は……わたくしに何度も……恥を散らさせるのでしょう？

言うまでもありませんが、私は一度も達していませんでした。実を言えば、飛鳥井は溜め息が出るほどの早漏らしで……私は少しも快を味わえませんでしたよ。

飛：お、おう、そうじゃ！　氷雨よ、いくらでも哭かせて進ぜる……儂以外では達せられぬ身にしてくれようぞ……。

薊：ああ、氷雨は幸せにございます……。

こうして。

臥所入りした初夜のうちに、私は飛鳥井を搾りつくしてやりました。童貞を喰うように簡単で……天狗になっていた小娘は、相手を舐めきってしまったのです。

薊：……ン……くぅ……。

筆は谷間まで達すると、脇下をめがけて逆走しました。腋のくぼみを掘りかえして、再び内に。

外から内、左右で鏡合わせの孤を描きつつ胸骨に集います。まるで鑢（ヤスリ）をかけているかのように、乳の付け根を磨き続けてきます。

飛：……わずかながら神意を受け始めたようだな。まだ、弱々しい筆致だが……。

つまり、私が首を振りだしたということです。

薊：……そうですか……くっ……ふ、ふふふ……とても嬉しい……ですね……。

二本の筆は、いまや乳房ぜんたいを掃くようになりました。

えっちシーン試し読み
ここからスタート!

繊細さと荒々しさを折りまぜて、緩急をたっぷりと取って……ただし決して、乳頭には触れずに。

薊：……くふぅ……ふ、うっ、ふぅ……ふう、ふぅ、ふぅ……。

私はしだいに、動悸を調えられなくなりました。呼吸が勝手に荒れだし、肘や膝が笑い始めました。

飛鳥井はかたくなに触ろうとしない乳頭を見つめて、

飛：ふむ……筆穂まで繋がらぬだけで、軸にはだいぶ溜まっているな。

「筆穂」は髪のことですから、「軸」は……女体ですね。私の乳輪は痼って盛りあがり、乳首も骨があるかのごとく尖りだしていました。

物あつかいされた怒りよりも、怖じ気に蹴りとばされて、

薊：……す……少し黙りなさい、この痴れ者。

私はつい、罵ってしまったのです。それを聞くやいなや、

飛：……筆が書き手を誹るだと？

男は血相を変えました。

飛：其は……其は、人が神に背くと同じぞ！

いきなりでした。飛鳥井は乳房の尖端に、筆を押しつけてきたのです。

お預けを喰らわされていた薄桃色が、筆穂のなかに呑みこまれて……獰猛な甘痒さに塗りつぶされました。筆が捻られた瞬間、

薊：くひぃ！

私はたまらず、炙られた声を漏らしていました。

飛：ほれ……ほれほれ！　うるさいのはどちらだ？　黙らねばならんのは誰だ！

それまでの放置を悔いているかのごとく、飛鳥井は左右の乳頭に小さな円を書き続けてきます。

乳暈の突起、その一つ一つが毛に削られて、小さな落雷をほとばしらせてきました。

薊：……く、ひっ……ひ、ひうっ、ううっ、くひぃ……。

ゾリッ。

薊：……ひいっ！

乳暈の境目から乳首の下っ腹にかけて、まるで刮ぎおとそうしているみたいに掃きあげられました。

二度、三度とくり返されるうちに、

薊：くひいっ、ひいいっ！

艶めき声が、透明感を増していきます。噴きだす汗も、女の匂いを強めていき……湿り気、熱気、ある種の花に似た香りが、闇の間を満たしていきます。頭がくらくらし始めます。私はたまらなくなって、首を振ってしまいました。

雁皮紙に、縦一本。

飛鳥井の筆同様、下から上へと流れました。執拗な責めがいきなり中断して、

飛：……こ、この微妙な震え方……この掠れの差し方……おお！

それは、本当に……純粋な詠嘆でした。

薊：……ふはぁっ、はあ、はぁ、はあ……あ、あなた……あなたは……狂っています……。

飛鳥井はまた、筆を代えました。中峰仕上げ筆、いわゆる「ふつうの筆」です。またもや二刀流。

ただし。

筆先を硯に浸し、たっぷりと墨を含ませてから、

飛：……淫（ミダラニ）。

祝詞の口調でした。

飛：淫（ミダラニ）悦（ヨロコビテ）姦（カシマシク）堕（オチル）隷（ニエ）、神意の五字を仕（ツカマツ）る。

厳かに唱えながら、乳房を覆うように墨書きしてきたのです。

飛：淫……形成（ケイセイ）なり、祝祷を恣（ホシイママ）に為すことの甚だしきを言うなり！

「淫」を左右の下乳に筆書きされた瞬間、

薊：……あひぃっ？

先ほどまでの「筆責め」とはちがいました。字を書かれているだけ。いわば、書道の本文が尽くされているだけなのに、

飛：悦……神を抱いて我意（シコリ）を抜き、恍惚と為す態なり！

薊：ひいっ？　ひいいっ！

字が。

筆跡が。

墨書きが……疼きだしたのです。あたかも心臓を直に撫でてくるかのように、

飛：姦……。

薊：あひいいっ！

まるで墨書きの漢字が、生きているかのように、

飛：堕。

薊：ひぃっ、う、嘘よぉ、嘘でしょう……こ、こんな……こんなのぉ……。

胸を、

飛：隷っ！

犯してきたのです！

薊：……ひーっ！

淫、悦、姦、堕、隷。

飛：ふ、ふふふ……良い、良いぞ……そうだ、わが筆女よ！　その調子だ！

薊：ふ、筆の跡が……じ、字がぁ……。

淫、悦、姦、堕、隷。

薊：……あひいいいっ！

字が、胸のなかに滲みこんできます。そして、ふくらみのなかにその「意味」を溶けこませてきます。

姦。

訴えるより熾烈なること。女が集められては和を乱し、意を招く。其、女の意ならずして神の意なり。

堕。

裂けた女肉を埋めるの意。呪攻の一つであり、敵巫の「形」を招崩せるなり。

薊：あひいっ、ひーっ！　ひいいーっ！

淫悦姦堕隷……淫らぞ、悦べ、姦しく、堕ちよ、隷ども……。

薊：こ……こんなっ、こんなのが……き……気持ちいいなんてぇっ！

淫悦姦堕隷、淫悦姦堕隷、淫悦姦堕隷淫悦姦堕隷淫悦姦堕隷。

飛：嘘なものか、これこそ占卜の末たる真の書ぞ！　さあ筆女よ、我が『飛鳥筆卜術』

に因りて……。

飛鳥井もまた、私の獅子吼に負けぬ声量で怒鳴ってきました。

私は舌の付け根までさらして哭き、飛鳥井は歯茎を剥きだして吠え……傍から見れば、獣どうしのいがみあいだったでしょう。

飛：……真の美を表せっ！

妖しい力を振るう筆は、私の悶えを一顧だにせず、すばやく走り続けます。真っ白だった乳房がみるみるうちに、淫らな経文で埋めつくされました。

薊：くひぃっ！　お、おかしくなるぅ！　むっ、胸がおかしくなっちゃうゥ！

「堕」のなかの「止め」が、乳暈を容赦なくえぐってきます。「隷」の縦棒が、下乳の傾斜を上り下りしてきます。

薊：ひーっ！　ひっ、ひっ、ひいっ！　くひいいーっ！

人の指や舌では紡ぎだせない……いえ、この世のものとは思われぬ快楽でした。そのまぶしいざわめきは、書き文字が増えるほど勢いを増し、さらには右と左でたがいに和して、妖しい勝ち鬨になりました。

飛：いいぞ！　そうだ、任せろ！　おまえのなかで、最も熱く疼いている部位にすべてを委ねろ！

飛鳥井が力を込めて、最後の「右はらい」を決めました。小石のように勃起していた乳首が、毛筆ならではのザラつきで薙ぎたおされました。

薊：……ッ！

※

……いまの私は、自らの官能を完璧に操ることができます。たとえ秘核をまさぐりぬか

れても、我を忘れることなどありません。

その私が。

筆で胸に落書きされただけで……無理やり翔ばされたのでした。あたかも、火薬の爆発に巻きこまれたかのような……破壊的な絶頂でした。

薊：……っくぁっ、ふはあぁっ！　ふはぁっ、はああっ、はふぅ……っく、くふぅ……ふうぅ……。

文字だらけの乳房を呆然と見やりながら……私はただ、未知の性感に酔わされていました。震える唇の端から熱い涎が垂れて、厚雁皮にシミを付けました。

飛：……おお……この墨条……この掠れ……す、すばらしい……。

飛鳥井は私の悶絶など見向きもせず、「私の髪がのたくった跡」を注視して、

飛：……これが……これこそ乳の歓喜字ぞ……女だけに許され、女だけが味わえる神意の現われぞ……。

私にとっては、

『乳房の筆責めに耐えられず、身も世もなく首を振りたくった跡』

です。すなわち、屈伏の記録です。

私は飛鳥井の妄念を削るどころか、その肥やしとなってしまったのでした。

飛：……美しい……美しいぞ、筆女！

狂った書家は、新たな紙を用意しました。憑かれた表情で、紫毫筆を取りあげました。

箸のような細筆を握って私の股間に割りこみ、茶の湯然と正座しました。まだ嗚咽中の女裂に丸顔を近づけ、私の雛人形が勃っているの確認してから、

薊：……ふひっ？　ひっ、ひうぁあああっ！

ええ、そうです。

飛：どうだ、穂先が効いておろう？　……人の指や舌では決して触れられぬ雌蘂の根まで、神意を刻んでやるからな……。

そこを。

よりにもよって、その泣き所を筆責めしてきたのです。

薊：うひぃっ！　ひぃっ、かっ、はひぃぃっ！　ひうぁ、くぅあああーっ！

穂先のわずかな動きにも、私は腰骨を金槌で殴りつけられたような衝撃を受けていました。「払い」を入れられるたびに奥歯をカチカチ鳴らし、「跳ね」を入れられるたびに……。

でも、それは下準備だったのです。私の蜜をしとどに吸わせて筆穂をほぐすと、飛鳥井はそれを硯に浸しました。たっぷりと墨を吸わせて……。

薊：かはっ！　だ、だめぇっ！　そ、それはやめてぇっ！　やめ……だ、はぎぃっ！

秘核に「神意」の五文字を書き始めたのです。

薊：ひーっ！

唐の書家には、米粒に写経できる者がいるそうですけれど……この飛鳥井も、たぶんできたでしょう。

淫悦姦堕隷。

充血してぽってりと膨れた芽の横っ腹に、呪いの文字が刻みこまれます。淫らな意味が染みこんできます。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
TEL03-3555-3431（販売）／FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改さん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
ⓒKILL TIME COMMUNICATION　Printed in Japan

http://ktcom.jp/